

なぜ吹奏楽部は文化部なのか ー運動部と文化部のダイトミーに着目してー

関 朋昭 *

名寄市立大学保健福祉学部教養教育部

【要旨】 そもそも運動部と文化部は何が違うのか、違うのであれば、何が違うのかを明らかにすることが必要であろう。運動部が外郭団体（中体連、高体連、高野連など）と紐帯を形成してきたように、文化部も外郭団体（高文連など）と深い関係性にある。つまりは運動部が外郭団体の主催事業（競技大会）へ参加しているように、文化部も外郭団体の主催事業（コンクール）へ参加している。そうした背景から、運動部活動における諸問題（顧問教師の過重負担、勝利至上主義など）は、運動部だけに特化した問題ではなく、おそらくは文化部活動にも存在する問題であると考えられる。そこで本研究は、部活動を運動部と文化部に分類することへの疑問を出発点とし、文化部の中でも部員数が多く、最も活発な活動をしているといわれる吹奏楽部に着目しつ、これまでの部活動のダイトミーを批判的に検討してみたい。

キーワード： 吹奏楽部、運動部、文化部、ダイトミー

1. はじめに

筆者は、部活動を運動部と文化部に分類することへ疑問を感じている。運動部にも文化的な内容があるであろうし、文化部にも運動的な内容を含むものがあるはずである。そもそも「部活動」は、教科、道徳、特別活動、総合学習などの「教育課程」ではなく、生徒が放課後、休日を利用して自主的に取り組む「課外活動」であり、生徒たちの自由な運営によって、人間的な成長、良好な人間関係の育み、社会性の涵養などを身につけるための教育的な活動であり「部活動は部活動」である。本研究が対象とする吹奏楽部は文化部に慣習づけられているが、文化部の中では最も活発的な活動をしているといわれている（佐川・羽澤，2009 など）。活発さを測る一つの

指標として表1に吹奏楽部と野球の加盟校数をまとめた。

吹奏楽部は、野球部には及ばないものの、年次推移でみれば、少子化の中、微増傾向を示している。この理由はいくつか考えられるが、コンクールの実施規定の変更が大きな要因の一つとして考えられる。全日本吹奏楽連盟が管轄する全日本吹奏楽コンクールの実施規定には、参加規定として参加人員を中学校の部50名以内、高等学校55名以内という規定がある。むろん「以内」なので、少人数で編制しても構わないが、大人数の方が戦術、戦略を練ることができるためパフォーマンスが高い。今日の少子化の問題を考えれば、一つの学校で、50名前後の部員を確保するのは容易なことではない。そこで、全日本吹奏楽連盟の各支部連盟^[1]は、少人数の吹奏楽部のために、中編成（B部門）／小編成（C部門）など独自の編成部門を設定しコンクール大会を運営している。しかし、十分に大編成できる部員がいるにも関わらず、あえて数を絞り中編成（B編成）／小編成（C部門）に出てくる学校も増え、コンクールの加熱化、勝利至上主義など教育的な意義などが問題となっている（戸田，2014）。

このように吹奏楽部においてはコンクールの加熱化、勝利至上主義などが憂慮されているが、運動部にみられる体罰問題が実は吹奏楽部にもみられる。公立中学校の吹奏楽部を指導していた外部指導者が、部員の生徒に平手で頭をたたくなどの暴力を加えていたことが分かり、外部指導者は体罰の事実を認め学校や生徒に謝罪した。この中学校の吹奏楽部は県の吹奏楽コンクールで金賞を受賞し、支部連盟のコ

表1 吹奏楽部と野球の加盟校数の推移

	中学校 吹奏楽部	高等学校	中学校 軟式野球	高等学校 高校野球
2010年	7,188	3,792	8,919	4,115
2011年	7,195	3,792	8,938	4,090
2012年	7,204	3,811	8,866	4,071
2013年	7,192	3,810	8,788	4,048
2014年	7,214	3,823	8,784	4,030

（注）数値は加盟学校数

2016年11月21日受付：2016年12月19日受理

*責任著者

住所 〒096-8641 北海道名寄市西4条北8丁目1

E-mail : seki@nayoro.ac.jp

ンクール大会へ出場していた（産経新聞，2013a）。さらに，公立高等学校の吹奏楽部では，顧問の教諭が部活動指導中に「消えろ」「邪魔」などの暴言を繰り返していたことが分かった（産経新聞，2013b）。いずれも部員から学校側への報告により，事実関係が明らかとなった。

このような背景から，運動部における経営的課題（部員の確保，顧問教師の過重負担，勝利至上主義など）は，運動部だけに特化した問題ではなく，おそらくは文化部，吹奏楽部にも存在する問題と考えられる。

II. 研究目的

本研究では，「なぜ吹奏楽部は文化部なのか」を疑問の出発点とし，運動部／文化部をダイコトミー（二分法）に捉えることを批判的に検討する。特に，文化部の中でも部員数が多く，最も活発な活動をしているといわれる吹奏楽部に着目し，以下の三点を明らかにすることを目的とする。

- ①運動部，吹奏楽部を史的な視点から整理する。
- ②運動部，文化部，吹奏楽部の先行研究を整理する。
- ③上記の考察より，なぜ吹奏楽部が文化部なのか改めて検討する。

III. 研究方法

1. 先行文献の選定

本研究は文献研究であり，主な分析材料は体育学（教育学）における運動部に関する文献と音楽学（教育学）における吹奏楽部に関する文献である。これまで多くの先行研究が部活動を運動部／文化部とダイコトミーに捉え，体育学は運動部，音楽学は吹奏楽部を対象とし研究成果を蓄積してきた。しかし本研究は，運動部／文化部の研究を併合させることによって，部活動研究の新たな研究姿勢や知見を生み出すことを目指すものである。つまり，今後，部活動研究を促進させていくためには，部活動を運動部／文化部に細分化あるいは分業し専門化させるのではなく，多面的なアプローチから部活動を理論的に統合し検討する研究方法が要請されてくると考える。

文化部イコール吹奏楽部という解釈は飛躍しすぎる，という批判が予測される。例えば，岡田（2009）は部活動に参加する中学生の学校への心理社会的適応に関する研究を行っているが，運動部は「野球」「サッカー」「バスケットボール」「ソフトボール」「バレー

ボール」「ハンドボール」「テニス」「卓球」「バドミントン」「陸上」「柔道」「剣道」「水泳」「ダンス」，文化部は「吹奏楽」「音楽」「美術」「芸術」「コンピューター」「演劇」「園芸」「家庭科」「漫画」「絵本」「外国語」に分類している。小野・庄司（2015）の研究も同様の分類である。そうした中，高橋・虫明（2015）の合唱部，加藤（2014）の演劇部，渡辺（2002）の茶道・華道部などの個別の事例研究なども散見されるが，吹奏楽研究の研究成果の蓄積には及ばない。もちろん，このように文化部の事例研究が少ないものの，吹奏楽部研究と相対化させつつ「文化部」として論じる研究方法も考えられる。しかし本研究は，吹奏楽部は運動部と比する活動状況にあり，また累加する吹奏楽研究などの動向を勘案すれば，運動部研究と対等の議論ができ，そこから「なぜ吹奏楽部は文化部なのか」という問いに答えられそうである。とはいえ，当然，吹奏楽部が文化部の全てを網羅できるものではなく，帰納的な提言となる点については研究方法上の課題でもあり限界でもある。

2. 本研究における吹奏楽部の定義

吹奏楽器，管楽器とは，空息を吸い込み，管内の空気を振動（クラリネットなど），もしくは唇を振動（トランペットなど）させて音を出す道具のことであり，息やリードで鳴らす木管楽器，唇を振るわせて鳴らす金管楽器に大別される。吹奏楽，管楽器の海外での訳語は，英語「Wind instrument（風の楽器，息の楽器）」，独語「Blasinstrument（吹く楽器）」，仏語「Instrument à vent（風の楽器）」である。例えば「管」の構造にないオカリナは管楽器ではないという見方もある。そうした中，H. F. オルソン（1969）は，管楽器と呼ぶことを避け，独語に則った「吹奏楽器」としている。

一般的に「吹奏楽部」を「ブラスバンド」と訳することがあるが，洋楽としての「Brass Band」は金管楽器の吹奏楽器のことを意味し，吹奏楽器のみで編制する英国の Brass Band が伝統的である。そうした意味においては，吹奏楽器，木管楽器，打楽器などで編制する部活動の吹奏楽部とは本来的には文脈が異なる。そのため文献や資料によっては，「吹奏楽部」ではなく「スクールバンド」「バンド」「音楽隊」などの標記も多く散見される。そこで本研究は，明らかに文意が異なる場合を除き，「吹奏楽／吹奏楽部」に統一した。

吹奏楽部の英訳については、①学校の部活動であること、②吹奏楽器だけではないこと、などの理由から「School Band」とした。しかし「Bloss Band」「Wind Band」「社会人吹奏楽団」などとの違いを明確に意味するものではないことをお断りしておく。

IV. 結果と考察

1. 運動部と吹奏楽部の史的考察

1) 校友会の誕生

安東(2015)によれば、校友会^[2]は明治中期以降、中等以上の学校内で組織され、主として雑誌発行、講談(演説)、運動などの各部で構成されたものである。特に運動部は、運動会の開催を含め、スポーツ活動を中心とし、学校の内外から注目された活動であった。また市山(2006)は、校友会は部活動、運動会、行事の運営、雑誌の発行などを行っていた組織で、旧制中学校だけでなく、高等女学校や実業高校にも見られたという。

渡辺(1997)、西川ら(1992)、渡辺(1978)、小島(1978)、平野(1974)、鶴岡(1973)の校友会運動部の研究によれば、1895年前後(明治20年~30年頃)に、各種学校の校友会に外来スポーツが普及・定着し、学校間の対抗試合が盛んになっていった。そのため、各々の運動部が継続していくための練習環境の整備、道具類の調達など、学校の支援体制(経営管理)が必要不可欠となっていく。学校が積極的に運動部を支援するということは、運動部を学校の下に置き、利用しようとする学校側の意図もそこに見出すことができる(安東, 2015, p. 57)。対抗試合が盛んになるにつれて、試合に勝つためのチーム強化策もみられるようになる。そして、対抗試合を増援する「應援団(以下、応援団と略記)」が誕生する。加賀・鈴木(1985年)によれば、明治30年(1897年)頃に応援組織が登場し、大正期の終わり(1920年代頃)までには、旧制高校校友会の中に「応援団」として位置づけられ組織化していったことが明らかとなっている。都賀(2013)は高知市立高知商業学校の事例研究より、1890年代後半、音楽部⁽³⁾に先駆けて運動部が續々創部されていき、大正期の半ば(1918年頃)には野球、テニスなどの運動部の試合当日には、応援のため、吹奏楽部を先頭に全校生徒が競技会場まで隊列をなして行進していたという。

このように運動部も吹奏楽部も校友会の一部であったことが分かる。そして校友会組織の考察より、運動部は対抗試合を行う活動を有するものであり、この時点において、吹奏楽部は運動部とは異なる活動であったといえる。それでは文化部に属するのかといえば、斉藤(2013, p. 104)の校友会費による考察によれば、「1930年代の当時において、いわゆる文化部系の活動が盛んになってきていた」という示唆からも、おそらく吹奏楽部は文化部に位置づけられていた可能性が高い。しかし、具体的な文化部の名称などの記述はなく、吹奏楽部が文化部に位置づけられていたのか、または他に分類された部活動だったのか、確認することができない。

2) 吹奏楽部の誕生

吹奏楽部の誕生は、1911年(明治44年)に京都府立京都第二中学校で(現・京都府立鳥羽高等学校)設立した楽隊部がそのルーツとされてきたが、それ以前にも吹奏楽部らしきものが存在していたことが少しずつ明らかになってきた。都賀(2013)によれば、1884年(明治17年)、高知県の海南学校(現：県立高知小津高等学校)で軍事教練のために結成された喇叭隊、鼓笛隊が吹奏楽部の一つの萌芽とみることができる、と述べている。これ以外にも、1894年札幌農学校音楽隊(現・北海道大学)などの報告がある。1898年開校の岡山県立商業学校(現・岡山県立岡山東商業高等学校)では、「成商会」という校友会の下、演説部、短艇部、野球部、柔道部、庭球部が次々に設立し、1906年に音楽部が誕生し、学校内外の諸イベントで演奏していたことが分かっている。

都賀(2013)に依拠すると、吹奏楽部のルーツとされていた京都府立第二中学校において、初代校長(中山再次郎氏)は、運動部の振興に大変熱心であり、音楽にも理解が深く、1911年に楽隊部(吹奏楽部)を設立したようである。そして1915年、現在の夏の甲子園の嚆矢となる第一回全国中等学校野球大会で優勝することになるが、大会では吹奏楽部が応援演奏を他校に先駆けて行い全国優勝に貢献した。これが今日、甲子園をはじめ野球応援に欠くことができない応援団吹奏楽部の誕生である。その後、吹奏楽は日本の各地へと次第に普及し、1930年(昭和5年)頃にはほぼ全土に広がっていった。そして、各地にて吹奏楽連盟が発足し、1939年(昭和14年)に全日本吹奏楽連盟が誕生し、翌年の1940年(昭和15

年)に第一回全日本吹奏楽コンクールが大阪朝日会館にて開催された(秋山, 2013)。

定岡(2014)は、アメリカの吹奏楽形態から影響を受けながら戦前戦後の日本で吹奏楽は新しい文化として始まっていったと述べ、特に戦後再開した全日本吹奏楽コンクールは、日本独自の形態と様式が確立したと示唆的である。また戸田(2014)は「吹奏楽部の甲子園」として全日本吹奏楽コンクールを中心に大きく発展しすぎた現代の吹奏楽が抱える問題を指摘している(詳しい問題点の考察は後述する)。確かに定岡(2014)が論じるように、日本における吹奏楽部は特異な環境の中で形づくられてきたことを筆者は支持したい。しかし、吹奏楽部が最も強く影響を受けたのは、実は運動部の対外試合の形態ではなかろうか。運動部の応援をする側だった吹奏楽部が、応援をされる側、すなわち対抗試合(コンクール大会)へと同質化していったのがその理由である。吹奏楽部が全日本吹奏楽コンクールと結びつけられた1940年が、文化部と運動部の分水嶺といえる。そして戸田(2014)が指摘する問題点も、人々の間で共通に認識され安定化した制度(構造化した対抗試合の形式)であるがゆえに派生したと考えること

ができる。このように吹奏楽部を紐解くと、運動部の対抗試合の誕生・展開・発展と同じ構造下にあり、関(2015a)が指摘するスポーツの勝利至上主義の成立過程と同じである。そもそも運動部も吹奏楽部も、正課外教育として学校の中で涵養されていくことになったが、その最大の理由、最大の価値は「部活動が人格陶冶に優れた教材」だったからである。むしろ正課教育の体育(運動部)、音楽(吹奏楽)とも不可分な関係性の上に成り立ち、明治政府が設置した体操伝習所(1878年設立)、音楽取調掛(1879年設立)まで遡行して考えていかなければならないであろう。前者(主幹)、後者(担当官)の要職を歴任した伊澤修二によって、体育/音楽は全国的に普及していく。このように日本の学校教育において運動部、吹奏楽部は、外すことのできない存在となっていた。

2. 運動部, 文化部, 吹奏楽に関する研究

1) 運動部と文化部の比較研究

運動部と文化部を比較した研究は、野口・山崎(1961)、仙田ら(1983)、桑野(1984)、東川・水上(1992)、青木(2003)、石田・亀山(2006)、岡田(2009)、

表2 先行研究の運動部と文化部の比較研究における分類

運動部		文化部
小野・庄司(2015)	野球・サッカー・卓球・バドミントン・ソフトテニス・テニス・陸上・バレーボール・剣道・アーチェリー・ソフトボール・空手・自転車・ラグビー・ボートワング	吹奏楽・美術・書道・茶道・演劇・調理・新聞・インターネット・商業研究・科学・漫画研究・写真・被服
岡田(2009)	野球・サッカー・バスケットボール・ソフトボール・バレーボール・ハンドボール・テニス・卓球・バドミントン・陸上・柔道・剣道・水泳・ダンス	吹奏楽・音楽・美術・芸術・コンピューター・演劇・園芸・家庭科・漫画・絵本・外国語
石田・亀山(2006)	野球・サッカー・バスケットボール・バレーボール・ハンドボール・ソフトボール・テニス・陸上・水泳・柔道・剣道	吹奏楽・美術・コンピュータ
野口・山崎(1961)	運動部・文化部の分類に関する説明なし	
仙田・荒井・池田(1983)	運動部・文化部の分類に関する説明なし	
桑野(1984)	運動部・文化部の分類に関する説明なし	
東川・水上(1991)	運動部・文化部の分類に関する説明なし	
青木(2006)	運動部・文化部の分類に関する説明なし	
葛西・石川(2014)	運動部・文化部の分類に関する説明なし	

葛西・石川 (2014), 小野・庄司 (2015) など枚挙に暇がない。これらの先行研究は一例ではあるが、研究方法の質問紙調査における運動部と文化部のダイコトミーを表 2 にまとめた。小野・庄司 (2015, p. 440), 岡田 (2009, p.421) は、部活動に所属しているか否か、また、所属している場合は部活動の名称を書くよう求め、表 2 のように分類している。石田・亀山 (2006, p.221) には詳しい研究方法の記載は無いが、被験者からの回答をオーサーが分類したものと推察する。この三つの研究以外においては、運動部／文化部への所属の有無を、被験者自らに判別させ回答させていたことが伺える。いずれにせよ吹奏楽部は文化部に位置づけられていることが分かる。

前者の研究者による運動部／文化部の操作的分類であれ、後者の被験者による判別分類であれ、運動部／文化部をダイコトミーとして思考する伝統的な部活動観がわが国にみられる。このような伝統的な思考は、ルネ・デカルトの心身二元論、分割し現象を捉えようとする近代科学の影響であると筆者は考える。こうした研究の背景から、既述の運動部と文化部の比較研究によって凡そ以下の二点を示唆できる。

- ①運動部と文化部には違いがあること
- ②運動部所属は文化部所属よりもポジティブな影響があること^[4]

しかし筆者は、運動部／文化部のダイコトミーをこのようにアプリオリに捉えることは、大きな危険性が孕んでいると考える。例えば、文化部は屋内の教室など密室とした狭い活動場所を拠点とする部が多いため、その活動内容を可視化できる機会が少ない。また文化部の中ではコンクール大会、コンテストへ参加できる部も限られており、活動実績、活動成果に関する情報量が運動部に比べて少ない。そのため、空き教室などを拠点とする質樸な活動を無分別に「文化部」と称する慣習が定着し、音楽室で活動する吹奏楽部は「文化部」の中へと組み入れられたと筆者は考える。一方、運動部は対抗試合へ参加する部がほとんどであり、試合結果はマスメディアに取りあげられ、成果（勝利）の対価として評価（報酬）が付与される。その成果（勝利）のためには膨大な練習量が求められる。運動部の練習場所は、グラウンド、体育館、武道場などを複数の部がシェアしながら活動するため、平日休日を問わず、互いの活

動状況を互いが相互監視するという水平的管理^[5]が機能するため衆目が知り得ることになる。そのため「運動部」と抽象的な概念として一括りにするのではなく、「野球部」「バスケットボール部」「陸上部」など個別の名称で了知され呼称されることが一般的である。こうした背景から、運動部／文化部の活動面の差異性に対して、運動部を優等に捉えるといった偏向が生成される。既述の先行研究もその可能性が高い。そもそも不活発な運動部もあれば、活発的な文化部もあるはずである。運動部と文化部を比較した東川・水上 (1991) の研究では、運動部は週 5 日間以上が約 80%だが、文化部は活動日数が分散しているが週 1～3 日間程度しか活動していない部が約 50%と報告している。このように部によって活動がまちまちである以上、運動部／文化部をダイコトミーとして捉えるのではなく、少なくとも活動内容、運営、理念に着目した研究姿勢が求められるべきである。全日本吹奏楽コンクールでの賞を目標として活動している多くの吹奏楽部は、運動部と較べても練習時間、活動日数は引けを取らない。仮に、表 2 のダイコトミーで、吹奏楽部を文化部ではなく運動部として分類した場合、違った研究成果の知見が得られていた可能性は否定できない。

葛西・石川 (2014) は運動部と文化部をめぐる研究の動向より、スポーツ活動によってレジリエンス^[6]が育まれたか、レジリエンスが高いからこそスポーツ活動経験を量的・質的に蓄積できたかは不明である、と示唆的である。つまり先天的な影響なのか、後天的な影響なのか、その因果関係は分からないということである。筆者は、基本的にこの考え方は妥当であると考えている。部活動が人間形成に寄与したのか、もともと人間形成の素質・資質が備わった生徒が部活へ参加しているのか、部活動の効用を実証的に論証することは、社会科学系の学問における研究方法上の大きなディレンマを抱えている。

2) 吹奏楽部に関する研究

表 1 でもみてきたように、ほとんどの中学校、高等学校には吹奏楽部があり、学校によっては 100 名を超す部員を抱えるところもある。このような背景の中、吹奏楽部を学問的に捉えた研究が蓄積されてきている。本節では、吹奏楽部に関する研究を概観し整理する。

佐川・羽津 (2009) は、中学校の吹奏楽部員の「満足感」「有用感」に関する研究を行っている。その研

究方法は、被験者群を吹奏楽部、運動部、文化部の三つに分類し考察し、その結果、①部活動の満足感に関する要因は共通していること、②「有用感」は、「充実感」「向上心」「集中力」のバランスのとれた指導によって高まること、③吹奏楽部員は「有用感」「充実感」「向上心」「集中力」のいずれについても総じて高く感じていること、④吹奏楽部員の「有用感」は「充実感」が大きく影響していること、などを明らかにしている。

同様に佐川（2008）は、高等学校の吹奏楽部と合唱部の音楽系部活動に着目し、指導の改善に資することを目的に研究を行った。その考察の視点として、スポーツと音楽の違いに留意しつつも、青木（2005）の高校運動部員の社会的スキルの研究に依拠し、①運動部の指導改善は音楽系部活の指導改善にも活用できる可能性があること、②合唱部は吹奏楽部よりも顧問、部員の人間関係に満足感を得ること、③部活動以外の音楽経験がある部員は部活動への適応力があること、④バランスの良い指導が生徒からの共感となること、⑤吹奏楽部はコンクール指向が強いこと、を明らかにしている。

定岡（2014）、吉富・谷原（1998）は、音楽教育としての吹奏楽、吹奏楽部を論じ、そのあり方について議論している。吉富・谷原（1998）は、学校における吹奏楽部活動は、成長期にある青少年の人間形成の上に大きな影響を与えると論じ、教育的効果以前の問題として、資金・練習場所・部員の確保などの経営的な課題を説いている。定岡（2014）は、全日本吹奏楽コンクールでの賞のみに固執するような勝利至上主義を問題視し、かつ生涯音楽をいかに育ませるか、指導者問題へ言及している。このように人間形成、生涯音楽、指導者問題（外部指導者を含む）、部員数確保に関した吹奏楽研究は、他に矢島（2014）、吉田（2015）、竹内（2008）などを列記することができる。

このように吹奏楽、吹奏楽部に関する研究を概観すると、どうやら運動部と同じ問題が議論されてきていることが分かる。その背景には、全日本吹奏楽コンクールの存在があり、その成立、展開について検討していく必要があるだろう。

3) 全日本吹奏楽コンクールの成立・展開

日本への正式な吹奏楽の伝習は、1869年（明治2年）、イギリス陸軍軍楽隊の隊長ジョン・ウィリアム・フェントン（John William Fenton, 1831-1890）が定

説となっている（秋山，2013，戸ノ下ら，2013）。その後、学校を媒介として吹奏楽が広まり^[7]、吹奏楽部が誕生（1890年代後半）したことは、校友会の誕生で考察した。学校の吹奏楽部の普及と同じく、企業、青年学校など、各地にて吹奏楽（バンド）が広がっていくことになる。その結果、各地で吹奏楽連盟が組織され、1939年（昭和39年）には全日本吹奏楽連盟が発足した。そして、第1回全日本吹奏楽コンクールが、1940年（昭和15年）に開催された。その後、第二次世界大戦、敗戦を経て、1947年（昭和22年）4月から新学制へ移行することになり、戦災の被害が少ない学校から吹奏楽部の活動が再開されていくことになる。1956年（昭和31年）には、中断していた全日本吹奏楽コンクールも再開し、戦後の吹奏楽活動がはじまることになる（秋山，2013，pp78-81）。

戦後再開した全日本吹奏楽コンクールの実施規程を表3にまとめた。都賀（2013）によれば、1960年代から出場人数30人から35人程度で、随意曲一曲だけを演奏する小編成部門が各都道府県に創設し、支部大会でもコンクールが行われるようになったという。さらに少子化の中、小編成部門への参加校が増えるに伴い、2001年から東日本学校吹奏楽大会が開催されるようになった。この大会が成長するにつれて、大編成部門の参加数が減少するというアイロニカルな状況となってきている。

全日本吹奏楽コンクールを中心に大きく発展した吹奏楽、吹奏楽部が抱える今日的課題を戸田（2014,p.29）に依拠し、以下に筆者が整理する。

- ①コンクールで演奏する課題曲と自由曲の二曲を一年間通して厳しい練習を積み重ねる
- ②メンバー選出の振るいに掛ける
- ③指導者から怒鳴られ、それにもめげずに練習を積み重ねる
- ④コンクール会場となるホールを事前に借り切りコンクールに備える
- ⑤指導者が指揮台でなく審査員席が設けられる場所に座り、マイク越しに支持を出す

このような指摘は、吹奏楽部に限らず、運動部にも相似した「部活動」の今日的課題であろう。

表3 全日本吹奏楽コンクールの実施規定の変遷

	出場人数		課題曲・随意曲の 演奏時間
	中学	高校	
1956年(昭和31年)	30人以内		10分以内
1957年(昭和32年)	40人以内		12分以内
1973年(昭和48年)	45人以内		12分以内
2013年(平成24年)	50人以内	55人以内	12分以内

(注1) 都賀(2013)の記述を参考に筆者が作成した

(注2) 中学と高校に限定した資料である

V. まとめ

文化部は、理念ならびに目的をどのように設定するかによって活動が異なる。コンクール大会、コンテストなどの成績であることもあったり、学校行事などでの役割の遂行、芸術芸術など高い水準での社会との相互扶助や発表・公開を提供することであったりもする。本研究で取り上げた吹奏楽部は文化部として位置づけられているが、校友会のもとに成立したときは、日頃の音楽の研鑽を定期演奏会で披露したり、学校行事などの式典で演奏したり、時には運動部の応援組織の一部として活動することが主たるものであった。吹奏楽部はもともと文化としての色彩が強かった。しかし、全日本吹奏楽連盟の設立のもと、吹奏楽は全国へと広がり、全日本吹奏楽コンクールが開催されることによって、優秀な成績をとること、つまり運動部と同じ競争原理が働く環境下へと吹奏楽部の主たる活動が重心移動した。

筆者が危惧するのは、運動部／文化部といったアприオリな慣習的な概念が暗黙裡に精選され、二つをダイコトミーに捉えることである。見誤ったダイコトミーは、誤解を生み出す可能性がある。それは、運動部／文化部の認知バイアスを高めることであり、運動部／文化部といった固定観念を強めることになる。本研究の視座に立てば、運動部と文化部はダイコトミーの対立項ではなく、相互補完的なものであ

る。もともと、校友会からはじまった部活動は、運動部は対抗試合だけではなく学内の運動会、行事を企画することが主たる体育的な活動の一つであり、吹奏楽部も学内・外にバランスのとれた音楽的な活動を行っていたはずである。しかし戦後、運動部が対抗試合へと偏重していき、吹奏楽部もコンクールへと偏重していき様相は同型・同系である。そして、書道部、演劇部、合唱部なども同じ構造下に組み込まれていく危険性がある。

本研究の主題である「なぜ吹奏楽部は文化部なのか」は翻ってみると「なぜ吹奏楽部は運動部ではないのか」という問いでもある。筆者が勤務する本学の吹奏楽部出身の経験者たちへ、この問いを投げかけたところ、「吹奏楽部は運動部（体育会系）」と認識されることに嬉しさを感じている学生が実に多くいた。もちろん一般化できる情報ではないが、このように感じている吹奏楽部員は少なくないように感じる。改めて学習指導要領を確認する（表4）。

部活動は、運動（スポーツ）や文化及び科学に親しませと記載されている。この文脈に倣えば、運動と文化の創造、運動と文化の最良の部分統合したものが部活動といえる。すなわち部活動は、運動と文化の「間（あいだ）」または「どちらか」に存在するものではない。わが国の「部活動」は、運動と文化のダイナミックな相互作用によって慣行化し制度化してきた独自性を有し、翻訳することが不可能である。「部活動は部活動として差異化した概念」としてしか存在し得ない。

本研究が吟味してきた結果、部活動を運動部／文化部といったダイコトミーの対立項に分類するものではない、と考えざるを得ない。そして本研究からのインプリケーションとして、コンクール大会での賞を主たる目的とした吹奏楽部は文化部という慣習的な文脈に意味づけることができない。この含意は、

表4 中学校学習指導要領および高等学校学習指導要領の「部活動」表記について

第1章 総則 第5款	教育課程の編成・実施に当たって配慮すべき事項（高等学校）
第1章 総則 第4	指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項（中学校）

(13)

生徒の自主的な、自発的な参加により行われる部活動については、スポーツや文化及び科学等に親しませ、学習意欲の向上や責任感、連帯感の涵養等に資するものであり、学校教育の一環として、教育課程との関連が図られるように留意すること。その際、地域や学校の実態に応じ、地域の人々の協力、社会教育施設や社会教育関係団体等の各種団体との連携など運営上の工夫を行うようにすること

運動部の対抗試合主義すなわち勝利至上主義の問題と同じ系（体系）であり，わが国における部活動の構造化した現象である。

今後，部活動に関する研究方法は，部活動の理念ならびに経営に注視すべきである。仮に経営を問題視するのであれば，主たる部の活動を方向づける哲学を対象とした議論が展開されなければならない，部活動の経営哲学に関する形而上学的なアプローチも今後の研究においては有益な研究テーマとなり得よう。

脚 注

- [1] 全日本吹奏楽コンクールの選出母体となる支部連盟は，北海道，東北，東関東，西関東，東京都，東海，北陸，関西，中国，四国，九州の11の連盟がある。
- [2] 安東（2015, p. 62）に依拠すれば，校友会という名称は，他に学友会，文武会，同窓会など様々である。組織員は教員と生徒からなるものが多いが，卒業生と在校生を中心とするもの，寮生，通学生別，活動内容別，地域別ものなど幅広い。組織の目的としては，三育（智・徳・体）の促進，会員相互の親睦といったものが多い。
- [3] 吉仲（2014, 2016）の音楽部の研究によれば，1900年頃から校友会にて音楽部が設立された。この当時の学校は唱歌教育が中心であったが，教科外活動の音楽部では，ピアノ，バイオリン，ハーモニカなどの奏楽を通じ演奏技術，表現方法など工夫を凝らしていた。音楽部と吹奏楽部が必ずしも同じではないことへの特段の留意が必要である。
- [4] 岡田（2009）によれば，Darling・Caldwell・Smith（2005），Larson（1994）などの研究成果から，運動部と非運動部では，非運動部の生徒の方がポジティブな結果が示されているという報告があることを示唆している。もちろんアメリカと日本の部活動の違いへ特段の注意を払うことが必要である。
- [5] 「水平的管理」とは，組織成員たちの助け合いと監視によるヨコの関係である。詳しくは，関（2015b）の管理論を参照して欲しい。
- [6] 加藤・八木（2009）によれば，レジリエンス（resilience）とは，元々はストレス（stress）とともに物理学の用語であった。ストレスは「外力による歪み」を意味し，レジリエンスはそれに対して「外力による歪みを跳ね返す力」として使われ始めた。今日では，レジリエンスは，防御力・抵抗力・回復力といったメンタルヘルスの意味で用いられている。
- [7] 阿部（2001），秋山（2013）などによれば，そもそも日本の洋楽の受容は，西洋式軍制とともに移入した鼓笛隊，吹奏楽器がはじめである。その後，軍楽（海軍・陸軍）で学んだ軍楽隊員によって技術，楽譜などが伝えられ，吹奏楽が民衆へと伝播していった。本研究の「(2) 吹奏楽部の誕生」で紹介した，1884年（明治17年），高知県の海南学校（現：県立高知小津高等学校）を例にとれば理解しやすい。

文 献

- 阿部勘一・細川周平・塚原康子・東谷護・高沢智昌（2001）
 ブラスバンドの社会史。青弓社：東京都。
- 秋山紀夫（2013）吹奏楽の歴史。ミュージックエイト：東京都。
- 安東由則（2015）校友会運動部の社会史：明治期男子中学校を事例に。武庫川女子大学教育研究所研究レポート，（45）：47-66。
- 青木邦男（2005）高校運動部員の社会的スキルとそれに関連する要因。国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要，（5）：25-34。
- Darling, N., Caldwell, L.L., & Smith, R. (2005) Participation in school-based extracurricular activities and adolescent adjustment. *Journal of Leisure Research*, 37 : 51-76.
- 團伊玖磨（1999）私の日本音楽史 異文化との出会い，NHK出版：東京都。
- 平野稔（1974）大分県における明治体育史の研究--中学校のスポーツについて。大分大学経済論集，26(4)：61-97。
- H.F.オルソン（1969）音楽工学。平岡正徳（翻訳）。誠文堂新光社：東京都。
- 本馬貞夫（2009）『高島秋帆 高島流砲術の開祖』。ヴォルフガング・ミヒェル・鳥井裕美子・川島真人編集，九州の蘭学。思文閣出版：京都府。pp.2159-225。
- 東川安雄・水上博司（1992）中学校・高校における部活動指導への取り組み方についての調査研究：運動部と文化部の比較を中心に。広島大学教育実践研究指導センター紀要，（4）：141-148。
- 市山雅美（2003）旧制中学校の校友会における生徒自治の側面：校友会規則の分析を中心に。東京大学大学院教育学研究科紀要，（43）：1-13。
- 市山雅美（2006）旧制中学校における自治の概念と諸類型：大正期の中学校における規律維持の組織と活動から。湘南工科大学紀要，40(1)：87-94。
- 石田靖彦・亀山恵介（2006）中学校の部活動が学習意欲に及ぼす影響—部活動集団の特徴と部活動への意欲に着目して—。愛知教育大学教育実践総合センター紀要，（9）：219-225。
- 加賀秀雄・鈴木敏夫（1985）旧制高等学校における応援団の組織化の実相とその歴史的役割について。日本体育学会大会号，（36）：85。
- 上尾信也（2000）音楽のヨーロッパ史。講談社：東京都。
- 葛西真記子・石川八重子（2014）高校生のスポーツ活動とレジリエンスの関連について。鳴門教育大学学校教育研究紀要，28：1-10。
- 加藤裕明（2014）演劇教育による協働的創造性の獲得：部活動による高校生の演劇創造過程に着目して。教育学の研究と実践，（9）：1-10。
- 加藤敏・八木剛平（2009）レジリエンス 現代精神医学の新しいパラダイム。金原出版：東京都。
- 小島享（1978）明治期における兵庫県中学校の校友会運動部について。神戸学院大学紀要（8）：141-167。
- 桑野裕文（1984）運動部と文化部における退部・転部についての調査研究。日本体育学会大会号，（35）：704。
- Larson, R. (1994) Youth organizations, hobbies, and sports as developmental context. In R. K. Silbereisen & E. Todt (Eds.), *Adolescence in context : The interplay of family, school, peers, and work in adjustment* (pp.46-55). New York : Springer-Verlag.
- 美山良夫（2004）『軍楽隊』。相賀徹夫編集，日本大百科全書。小学館：東京都。
- 野口義之・山崎秋則（1961）学友会（運動部，文化部）に対する態度について。体育学研究，6(1)：44。

- 西川友之・大川信行・水谷秀樹・中川孝 (1992) 明治期における富中文武会の体育活動に関する研究：校友会雑誌「文武会誌」を中心として．富山大学教育学部紀要，(A) 文科系 40：15-27.
- 岡田有司 (2009) 部活動への参加が中学生の学校への心理社会的適応に与える影響：部活動のタイプ・積極性に注目して．教育心理学研究，57(4)：419-431.
- 小野雄大・庄司一子 (2015) 部活動における先輩後輩関係の研究：一構造，実態に着目して．教育心理学研究，63(4)：438-452.
- 定岡利典 (2014) スクールバンドのメソードに関する一考察．総合教育センター紀要，34：23-47.
- 佐伯茂樹 (2007) 管楽器おもしろ雑学事典．ヤマハミュージックメディア：東京都.
- 佐川馨・羽澤知子 (2009) 中学校吹奏楽部員の部活動「満足感」「有用感」に影響する要因一部活動に所属する中学生への質問紙調査の結果から．秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要，(31)：29-39.
- 佐川馨 (2009) 音楽系部活動に所属する高校生の部活動適応感測定尺度作成の試み．秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要，30：53-63.
- 斉藤利彦・市山雅美 (2008) 旧制中学校における校友会雑誌の研究．東京大学大学院教育学研究科紀要，48：435-461.
- 斉藤利彦 (2013) 近代日本における校友会運動部の展開：学校文化研究へのアプローチ．学習院大学文学部研究年報，(60)：103-123.
- 坂本保富 (2003) 幕末期日本におけるオランダ語号令の受容とその日本語化問題―土佐藩「徳弘家資料」所収のオランダ語号令関係史料の解説と分析―．信州大学教育システム研究開発センター，(3)：1-39.
- 産経新聞 (2013a) 「太鼓のバチで頭たたく」…「金賞」吹奏楽部の指導員が体罰．2013年2月4日付.
- 産経新聞 (2013b) 山形県南部の県立高校で、吹奏楽部顧問の30代女性教諭が、部活指導中に部員に「消えろ」「邪魔」などと暴言．2013年6月9日.
- 関朋昭 (2015a) スポーツと勝利至上主義．ナカニシヤ出版：京都府.
- 関朋昭 (2015b) 学校運動部活動の体罰問題に関する管理論的一考察：部活動運営に困難を極めた中学校や体罰があった高等学校の事例から．北海道体育学研究，50：69-79.
- 仙田雅俊・荒井貞光・池田二三夫 (1983) 運動部と文化部の比較研究．日本体育学会大会号，(34)：156.
- 椎山克己 (2006) 生涯教育における吹奏楽活動の役割と今後の展望：スクールバンドを主体としたコミュニティー吹奏楽団の活動事例から．久留米信愛女学院短期大学研究紀要，29：39-46.
- 高橋安喜子・虫明眞砂子 (2015) 岡山県の中学校における合唱活動に関する考察．岡山大学教師教育開発センター紀要，(5)：52-61.
- 竹内俊一 (2008) スクールバンドにおける女子化について．音楽文化の創造，49：42-45.
- 戸田直夫 (2014) 吹奏楽史における阪急少年音楽隊：職業訓練としての洋楽受容．フィロカリア，(31)：17-32.
- 友添秀則 (2009) 体育の人間形成論．大修館書店：東京都.
- 戸ノ下達也編著 (2013) 日本の吹奏楽史：1869 - 2000．青弓社：東京都.
- 都賀城太郎 (2013) 『スクールバンドと吹奏楽の普及 (第2章)』戸ノ下達也編著 (2013) 日本の吹奏楽史：1869 - 2000．青弓社：東京都.
- 塚原康子 (2001) 『軍楽隊と戦前の大衆音楽 (第3章)』阿部勘一・細川周平・塚原康子・東谷護・高沢智昌 (2001) ブラスバンドの社会史．青弓社：東京都.
- 鶴岡英一 (1973) 明治期における広島県中学校の校友会運動部について．体育学研究，18(1)：9-22.
- 矢島正 (2014) 中学校吹奏楽部活動における外部指導者の活用についての考察：中学生、保護者、顧問教師への意識調査をもとに．群馬大学教育実践研究，31：163-172.
- 八代勉・中村平 (2002) 体育・スポーツ経営学講義．大修館書店：東京都.
- 吉田治人 (2015) 音楽教育の一環としてのスクールバンド指導の在り方に関する考察．信州大学教育学部研究論集，8：109-127.
- 古仲素子 (2014) 1900年代-1910年代における旧制中学校の音楽教育：東京府立第三中学校学友会音楽部の活動に着目して．音楽教育学，44(1)：13-24.
- 古仲素子 (2016) 1920年代の中学校における音楽部の活動：ハーモニカの普及とその影響に着目して．東京大学大学院教育学研究科紀要，55：29-38.
- 吉富功修・谷原葉子 (1998) スクールバンドの指導者に関する研究 (2) ―学校吹奏楽活動の教育的効果を中心として―．広島大学教育学部教科教育学科音楽教育学教室論集，X：11-34.
- 渡辺誠三 (1997) 中等学校における部活動の発祥と位置づけ―明治20年代を中心として．日本特別活動学会紀要，(6)：35-47.
- 渡辺誠三 (2002) 中等教育における茶道部・華道部の特異性に関する研究―戦前、戦後をととして．日本特別活動学会紀要，(10)：41-48.
- 渡辺融 (1978) 明治期の中学校におけるスポーツ活動．体育学紀要，(12)：1-22.

Original paper

Why is school band the cultural club?

-Dichotomy with athletic club and a cultural club -

Tomoaki SEKI*

General Education Section, Faculty of Health and Welfare Science, Nayoro City University

Abstract: All an athletic club and a cultural club will need to make it clear what is different or what is different when it's different. There is also a cultural club in an affiliated organization and deep relationship as an athletic club has formed a bond with an affiliated organization (Tyutairen, Koutairen and Kouyaren). A cultural club also participates in sponsorship business of the affiliated organization (contest) so that an athletic club may participate in sponsorship business of the affiliated organization (tournament). I can think miscellaneous problems in movement club activities (overweight burden and victory supreme principle of an advisor teacher) are the problem which also exists in in cultural club activities, not a problem specialized in only an athletic club from such background. So this research would like to consider dichotomy of the former club activities critically, making the question to classifying club activities into an athletic club and a cultural club a starting point and aiming at the brass band which is called when I'm carrying on the activity that it's numerous and active even in the cultural club.

Key words: school band, athletic club, cultural club, dichotomy